平成二十六年四月十日　改訂

「かな」について

加藤　三一

かなという語の原形は「かりな」（仮り名・借り名）で　それが「かんな」と変化したもの．「な」は　文字という意味で　漢字を「本字」と考える立場から漢字の仮りの文字という意味になる．

かな　とは　ふつう曲線が主である「ひらがな」と　直線が主である「かたかな」とをさす．　広義には　万葉がな（真仮名）も含まれる．　ひらがな・かたかなの数は　一九四六年（昭和二一年）に「現代かなづかい」で　戦前に使われていたゐ（井）・ゑ（江）はなくなり　基本形四六字ときまった．

一九〇〇年（明治三三年）以前には　ひらがな・かたかなともに　いろいろな字体があり　数が一定していなかった．　それらの字体を　ひらがなの場合は「変体がな」、かたかなの場合は「異体がな」という．　特に　変体がなは　一音に多数の文字があり　教育や社会生活に不便であった．そこで　一九〇〇年に　小学校令施行規則によって　一音一字ときまったのである．それが　現代の　ひらがな・かたかなの　字体である．

かたかなという名称は　アは「阿」の阝から　イは「伊」のイからというように漢字の一断片である　偏・旁・冠・脚　などからできている例が多いために呼ぶ．かたかなは　発生当時から現代に至るまで漢文訓点用　あるいは　漢字と混用して使用されていた．

一方　ひらがなは　ひらがなの「ひら」が平易・通俗の意味からきたともいわれるがはっきりしない．　ひらがなは　漢字（奈良時代の万葉がなに使われた漢字）を書きくずし　草書化しつくし、さらに女子の手で芸術的に洗練しつくされたもので　平安初期に発達した．そして　ひらがなは　単独で用いられた．（後世になると　片かなと同様に　漢字とともに用いるようになる）

平安時代中期．紀貫之は「土佐日記」の冒頭で「男もすなる日記といふものを　女もしてみむとてするなり」と女性が書いたようによそおって　かな文で書きはじめている．　これは当時　男性は漢文で日記を書いたのに対し　女性は、

ひらがなで日記を書いていたからである．　漢文にも達者な貫之が女性の立場にたって　あえて　かなで日記を書こうとしたのである．　このように　漢字が男手といわれるのに対して　女性の手によって使われたひらがなを　女手ともいったのである．

いろは歌四十七文字

ひらがな四十七文字を重ならないように使って　仏のさとりを　七五調の歌にしたもの．習字の手本として利用された．

「色は匂へと　散りぬるを　わか
世たれそ　常ならむ　有為の奥山
今日越えて　浅き夢見し　酔ひもせす」

（「花が美しく咲きにおっても　いつかは散ってしまうように　この世ははかないものである．しかし　生死を越えて悟りの境地に達すると　つまらぬことに迷わなくなる」という意味）

かなの発達

以いい	禮礼れ	己ここ	
呂ろろ	曽そそ	衣ええ	
波はは	川つつ	天てて	
仁にに	祢ねね	安ああ	
保ほほ	奈なな	左ささ	
部へへ	良らら	幾きき	
止とと	武むむ	由ゆゆ	
知ちち	宇うう	女めめ	
利りり	為ゐゐ	美みみ	
奴ぬぬ	乃のの	之しし	
留るる	於おお	恵ゑゑ	
遠をを	久くく	比ひひ	
和わわ	也やや	毛もも	
加かか	末まま	世せせ	
与よよ	計けけ	寸すす	
太たた	不ふふ	无ん	

〔主な変体がな〕昭和五十三年三月十日　増補2刷
字体は野ばら社の変体仮名帳及び柏書房のかな大字典を参考にした

平仮名	主な変体仮名
あ	安
い	以
う	宇
	阿
	伊
	宇
	（愛）
	（意）
	（有）

し	さ	こ	け	く	き	か	お	え
之	左	己	計	久	幾	加	於	衣
志	佐	古	介	具	起	可	於	衣
新	（散）	（許）	介	倶	支	閑		江

な	と	て	つ	ち	た	そ	せ	す
奈	止	天	川	知	太	曾	世	寸
奈	登	天	徒	地	多	楚	世	春
那	（東）	亭	津	（千）	堂	所	勢	須

ほ	へ	ふ	ひ	は	の	ね	ぬ	に
保	阝	不	比	波	乃	祢	奴	仁
保	遍	布	飛	者	能	年	怒	尓
本	邊	婦	（悲）	者	能	年	（努）	耳

ら	よ	ゆ	や	も	め	む	み	ま
良	与	由	也	毛	女	武	美	末
羅	（餘）	遊	屋	茂	免	無	三	満
	（餘）		（夜）	裳	馬	（舞）	見	万

ん	を	ゑ	ゐ	わ	ろ	れ	る	り
无	遠	恵	為	和	呂	礼	留	利
	越	衛	井	王	路	連	留	利
							流	里

かたかな一覧表

（ブリタニカ国際大百科事典から）

ア	「阿」の扁の行体「ア」
イ	「伊」の扁
ウ	「宇」の冠
エ	「江」の旁。もとはヤ行のもの
オ	「於」の古体「於」の扁
カ	「加」の扁
キ	「幾」の草体の「丝」の略。「き」の終画略
ク	「ク」の第二画まで
ケ	「介」の異体「个」
コ	「己」の行体に基づき、第二画までを直線化
サ	「散」の初三画
シ	「之」の行体「し」
ス	「須」の旁の草体
セ	「世」の草体
ソ	「曾」の初二画
タ	「多」の略
チ	「千」の行体
ツ	「川」。また「州」の略体
テ	「天」の第三画まで、「チ」の転
ト	「止」の初二画
ナ	「奈」の初二画
ニ	「二」
ヌ	「奴」の旁
ネ	「祢」の扁
ノ	「乃」の略体
ハ	「ハ」の草体
ヒ	「比」の略
フ	「不」の初二画
ヘ	「阝」の草体。「阝」は「部」の省文
ホ	「保」の終四画
マ	「万」の草体
ミ	「三」
ム	「牟」の初二画
メ	「女」の略
モ	「毛」の略
ヤ	「也」の草体
ユ	「由」の中二画
ヨ	「與」の上部右側
ラ	「良」の初二画
リ	「利」の旁
ル	「流」の終りの部分
レ	「礼」の旁
ロ	「呂」の上部
ワ	「輪」の象形。また「和」の旁
ヰ	「井」の草体
エ	「恵」の草体の直線化
ヲ	「乎」の初三画
ン	（象徴的記号）

踏まれても
根づよくしのべ
道芝の
やがて花さく
春は来ぬべし

（注）

も（も）	や（や）
く（く）	こ（か）
し（し）	ゑ（春）
ゑ（道）	ゐ（来）
ゑ（芝）	

飯田弥右衛門氏による 越谷市立東中学校
第21回 卒業生へのはなむけのことばより（昭和五十三年三月）